

幽玄

題字
高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟
会報 No. 8
平成6年11月29日

(仮称)横浜能楽堂開館準備委員会発足す

——柿落とし実行委——

委員長に山崎有一郎氏



新堀委員長

横浜市は平成八年三月竣工予定の(仮称)横浜能楽堂のオープンにむけ、九月二日「開館準備委員会」を発足させた。

同委員会は、横浜能楽堂を開館するに当たり、運営方法及び自主事業等について、能楽関係者、学識経験者及び市民の意見を反映させることを目的として設置されたもので、その委員は市長が委嘱し、委員の任期は平成八年三月三十一日までとされた。地元能楽界から田辺竹生(観世)、塚田光太郎(宝生)、守屋与四巳(金春)の三師が入り、当能楽連盟から新堀豊彦会長、堀内万沙子、浦部毅両副会長(梅若、喜多の代表)、望月悦夫常務理事(金剛)の四名が選ばれた。その他の委員として、

かもん山新能実行委員長であり、かつ能楽堂建設促進会副会長でもあった野並豊横商副会長、小林進関東学院大助教授、平田澄子立教大学教授、岩崎ともみ岩崎学園理事長、パトリシア・ペーダー・ジョンストン カナダ大使館学術交流担当官、中村實はまぎん産業文化振興財団事務局長、金子肇市教委教育部長、浅野俊博市民局長、木下政昭市文化振興財団専務理事などが委嘱をうけた。

なお委員長には新堀会長、副委員長には小林助教授が就任した。第一回の会合において、開館記念式典(柿落とし)は平成八年六月下旬に内定。各流家元の出演による公演を行うこととし、なお「(仮称)横浜能楽堂柿落とし公演実行委員会」を組織し、その委員長は能楽評論家山崎有一郎先生に依頼することが決定した。

「久良岐能舞台」の近況

横浜の能楽会の大先輩、宮越賢治翁が市に寄贈され、市が巨費を投じて現在の形に整備した久良岐能舞台については、既に多くの紹介が行われていますが、今回は高澤館長のお話と提供していただいた資料を基に、久良岐能舞台がいかに大切に運営され、市民に愛され、利用されているかについて御報告したいと思います。

一、運営について

磯子区長が委員長になり、行政、地元町内会代表、横浜及び区内能楽関係者合計十名により運営委員会が編成され、絶えず新しいアイデアで運営の充実に期しています。

二、施設別利用率

施設は能舞台、茶室、和室二部屋ですが、利用率は夫々四六%、七%、六一%となっており、全館貸切は十三%です。一寸低く見えますが、午前と午後に分け、一日を二単位としているので、実際はフル稼働といえます。

三、団体別利用状況

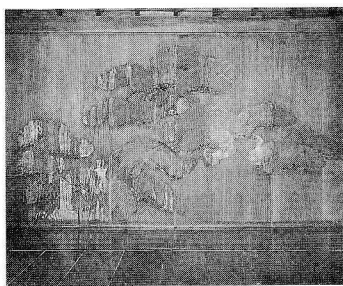
能楽関係延一三、六六一人(四九〇件)、その他の文化団体(茶道、舞踊、俳句等)延二、五〇九人(三三三件)となっています。

四、月別、曜日別利用状況

八月と十二月が千人弱で少なく、十月が二、一六〇人で一番多くなっている。その他は千人程度といった所です。曜日としては日曜が四、八七二人、土曜が三、二七五人と多く、一番少ないのは木曜の八一五人です。

五、教室、つどい及び講座

教室は観世が初級、中級、梅若に分かれますが、他は一流一教室で合計百四十名の方が立派



平福画伯の老松

な先生について勉強しています。各流が練習の成果を競う「謡曲と仕舞のつどい」は五流一会に分けて行われ、出演者四四〇人に対し、観客は約七百人となっています。

専門家による能・狂言講座も年一回開催され(有料)百五十人程度の人が受講しています。

六、能衣装について

宮越夫人が寄贈された能衣装が廿五組あり、一通りの演目が

こなせるようになっていきます。年一回、鎌倉在住の能衣装専門家、堂本朋子さんのお世話で虫干を行い、その際口込みで見学を認めています。来年からは一般公開も検討中です。

七、その他

見学者はお花見、紅葉見物を兼ねた四月と十一月が一番多く、年間延三千三百人程度です。

職員は館長さんの他、一名が専属で、貴重な文化財をどうやって市民の皆さんに気持ちよく有意義に活用して貰おうかと日夜、努力を重ねて居られます。御苦労に感謝しつつ、節度を守り、楽しく利用させていただこうと心に期して探訪を終えた次第です。(編集委員)

五流大会への御協力御礼

連盟副会長 堀内万沙子
観世流梅若会

第十回五流合同謡曲大会は、平成六年五月二十六日(午)午前十三時三十分始め、お当番の梅若が番組の最初と最後を受けもち、順調に、素謡七番、連吟六番、仕舞十五番、独吟三番、独鼓、一調、と進行了。終了は予定より十五分延長して四時四十五分でした。楽屋が大変な賑わいでしたが、初番から終り迄、お見所ご観賞なさった方々、本当にありがとうございます。

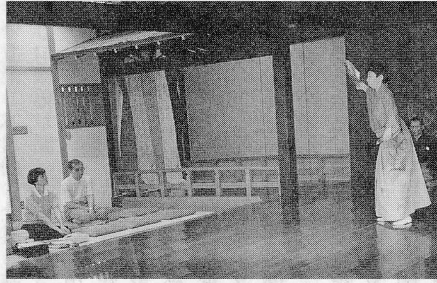
久良岐各流謡曲と
仕舞のつどい

金 春 流

連盟常務理事 副島 為安

金春流の集いは平成元年より毎年七月第一日曜日に実施し、本年が第六回に当りました。

本年の入場応募人員は三九四人で抽選により一六七人を受け



仕舞 田村

付け、当日参加人員は一三八名で、見所は満杯の状況でありました。出演人員は毎年三二〜四五人で、素謡一〜二番、独吟一〜五番、仕舞が最も多く一七〜二四人となっています。番組の構成は、先ず久良岐教室の生徒の素謡又は連吟から始まり、新人を含めた生徒全員で一年間の

上達の程を聞いて貰います。

次に教室の方々の仕舞を披露しています。教室が始まって数年以内の方々が熱心な稽古の程がうかがえます。新しく始められる方々のご参考にしていただけたら幸いです。

次は独吟で謡のみ稽古している人々が主で、キリ、クセ等の一部で、特に聞き所をを抜き出して披露しています。又本年は独吟が多かったので中止しましたが、例年は旧い方々の素謡を一番入れ素謡の良さに馴染んで貰っています。それから個人稽古を習っている人々の仕舞を披露し、毎年違った番組を選び、軽いものから重いもの、初番から五番まで、色々の曲目を披露しています。旧い方、熱心な方が、様々な芸で皆様方の目と心を楽しませてくれると信じています。

最後は金春流の職分で久良岐教室の先生である守屋泰利先生とお父さんの守屋与四巳先生（昭和四二年能楽部門無形文化財指定、平成三年勲五等旭日双光章受賞）の高砂、狸々等の仕舞で納めています。これからもこの集いが盛大に催されるよう、久良岐教室への参加又は先生宅での個人稽古や団体出張稽古にご参加下さいますようお願い申し上げます。

金 剛 流

横浜金剛会 望月 悦夫

毎年八月の暑い盛りに、正に緑陰の静寂、久良岐能舞台で催される金剛流の集いは、市の招待で足を運ばれる市民の皆様と共に、演ずる流友の方々にとっても楽しみを分かちあえる結構な催しとなって定着しました。

当流のつどいでは番組の編成にあたり主題を定めております。一昨年の平家物語から昨年は関東の謡跡、今年八月二十八日のつどいでは「花」をテーマにとりあげました。松・竹・梅・桜をはじめ薄や雪の花など季節の花十三種の曲を集めて、連吟八番、仕舞十五番の番組としました。



装束付の実演

今年も見所が一杯になるお客さんを迎えて、久良岐教室のグループも入

って五十数名が出演しました。一昨年から披露している装束付が好評とのことで今年も田村信一郎先生のご指導と解説で入門の若師により修羅姿（面・中

将）とかつら物（面・小面）の二態をお見せすることができました。今回は見所のお客さんの中からおシテを求めたところ若い女性二人が舞台に上がり、しっかりした構えで付けてもらいました。

ご本人は勿論、見所の皆さんも装束と共に変わって行く姿に目を凝らしておりました。

附祝言は田村師が仕舞「老松」を勤められ、拍手も鳴り止んで、夕陽がようやく傾いた幽玄の谷から、また来年を約して帰路につきました。

喜 多 流

馬場 洋一

九月十一日曜日、台風二二号が関東地方を狙っている。

今回も一般の観覧に定員の二倍を超える応募があり、見所はお客様で一杯になるはず。私のような素人は大勢の方の前で謡うのは緊張するが、嬉しいものだ。客足が気になる。

この夏、客船にっぽん丸で三つの中国を訪問する十日間の船旅に参加した。前半は二つの台風で船は揺れた旅の半ばも過ぎた八月十四日夕刻、世界初といわれる船上新能「羽衣」が演じられた。演者はシテ・友枝昭世、ワキ・森常好、地頭・出雲康雅、



独鼓「六浦」

台風二 一号は東に向きを変え、速度を上げ、銚子沖へ去った。

小鼓・北村治、大鼓・柿原崇志、笛・中谷明、他の一流の顔ぶれ。我々洋謡会も舞台上に上がる榮譽を得た。「落日の紅は」に台湾海峡に夕陽が沈み、「霞に紛れて、失せにけり」頃、舞台の後ろ、航跡の右上には月が浮かんでいた。大自然の舞台と能の融合は観客のみならず演者をも感動させ、拍手はなかなか鳴りやまなかった。

「俺たちは台風を蹴散らしてきたからね、二二号も心配ないよ」

台風を心配する私達を、その船旅の「名譽船長・浦部毅」が自身に満ちた一言で元気づける。洋謡会は、裏山で得意の直前特訓をいつもより入念に行い、全員で「小袖曾我」を謡う。そして、吉田さんと私が浦部会長の太鼓で「六浦」を謡う。雨は降らず満員となったお客様がじっと聞いてくださるのが肌で感じられた。

為相卿と「六浦」

いかにしてこの一本にしろけむ山に先立つ庭のみみぢ葉

兵頭 廣子

稱名寺境内に、能「六浦」の謡蹟、青楓の碑がある。

山に先立つ庭の紅葉を賞でた冷泉為相の一首に感応し、青楓の操を立てたという能の主題となった楓。檀家の人々がその由縁に、楓の木を植え継いできたという。何代目かの楓も立ち枯れ今は謡蹟碑のみが残っている。

冷泉為相は藤原為家六十六才の時の子。母は阿仏尼。為家の先妻との間の長子為氏は、阿仏尼と同年輩であったという。晩年の子だったのでことに愛され、幼にして家伝の三代集巴相伝和歌文書等を譲られた。また為家は「悔返」して為相に譲った。為家没七十八才。一族の間に内紛が続き、為氏は細川庄も返さなかった。阿仏尼は朝廷や六波羅府に提訴したが埒があかず、鎌倉幕府に越訴。逢坂の関を発ち、十四日間の東下の旅の後、鎌倉に着いた。月影谷に滞在して上訴。しかし頃は弘安、蒙古来襲で世情騒然とした時期であった。阿仏尼は志を遂げずに没した。程なく為氏も没。

争いはその子為世と為相の間に引継がれ、ようやく勝訴が確定したのとは母尼没後三十年、為相五十一才の時であったという。為相は度々鎌倉に下向・滞在した。將軍久明親王や北條貞時等幕府の要人、夢窓国師等とも親しく、鎌倉歌壇の指導者と仰がれ、六十六才で没した。



稱名寺 全景

嘉暦三年（一二三二）「公卿補任」には「七月十七日薨於関東」とあるが、「常乗記」には「七月十六日於二京都一逝去」とある。

鎌倉浄光明寺には為相の廟がある。この辺りに為相が居住したので、藤谷といひ、藤谷黄門（中納言）とも呼ばれていた。今はこの地名は残っていない。本堂背後の小高い茂みの中に宝篋印塔の為相の墓がある。

浄光明寺の副住職様のおはなしでは安永年間（江戸中期）に当寺で墓前祭が行なわれ、為相卿を慕う歌人達が献詠した短冊が残っているという。また今も冷泉家の法要が当寺で行われているそうである。

楓の歌は藤谷和歌集に収められているが、前書がないので、稱名寺境内であるかは定かでない。過日、金沢文庫特別展「中世紙背文書」で重要文化財連歌懐紙が展示された。正慶元年（一三三二）九月十三日、稱名寺阿彌陀堂で行われた連歌会の記録で「冷泉殿加点点々」とあった。時期が為相没後になるから、冷泉黄門と呼ばれたその子為秀のことであろうか。

金沢六浦は、歌の名門冷泉家と由縁の深い地なのである。

参考文献

井上宗雄「中世歌壇史の研究」

関靖「かねさは物語」

阿仏尼「十六夜日記」 他

（鎌倉評定衆）

宇都宮 頼綱女

（系図）

御子定家

俊成一定家一為家

（系図）

安嘉門院四條

（阿仏尼）

為守

定寛

冷泉家（冷泉黄門）

為相一為秀

鏡板の老松

宝生流教授囃託会
神奈川県副支部長 村上 淳男

横浜能楽堂の完成は平成八年三月と承っているが、私が今から楽しみにしているのは、復元される染井能舞台の鏡板の老松のことである。

松本恵雄先生の同門誌「此松」の表紙絵に、毎号松に因んだ水墨画を描いて来た私としてとりわけ能楽堂の目玉ともいえることは当然のことながら、もうひとつ、染井舞台の鏡板に梅が描き添えられているという珍らしさにひかれたからでもある。しかも、単に珍らしい、というよりも、鏡板の老松の絵の伝統としては、江戸時代からいわれていた故実の型（創元社発行「能楽全書」第四巻）によれば、(1)根際からではなく、床高だけ上より描く（床面を地面とは見ないで、実の土地に生い立っているものとして描く）、(2)鏡板に向って、中心より左下に根方（根）を起し、それから右上へ幹が曲り延びる、(3)他に一樹たりとも添えず、殊に花木は厳禁以上三点があげられているのに対し、明らかに(3)に反していることは事実である。

もっとも、染井能楽堂は明治

初期に前田齊泰公の隠居所として建てられたもので、前田家の祖先・菅原家の梅をあしらったものであろうから、脇鏡板の竹とあわせ、松竹梅三友のめでたいとりあわせともなり、新旧パランスなどじっくり眺めたい。因みに、(1)と(2)に反するものとして、今でも気がかりなのが国立能楽堂の老松（森田曠平画）であり、地面から二本の松が立ち上っているように描かれている。現に、国立能楽堂の完成期に背景の松を巡ってひと悶着あったことも事実である。

しかし、これとても、「宝生能楽堂落成十周年、宝生会誌」の中に「老松の様式は江戸期には狩野派風による老松というきまりがあり、……戦後はやや乱れて画家独自の工夫によるものもたくさんあります」という記事があり、さらに、松本先生は「原則を無視されると演技も出来なくなるが、それを守った上での多少の工夫は構わないと思います。国立能楽堂の松は違和感はありません」（ホテルオークラ社内報「葵」一〇八号塩野筆）と云っておられるのを併せて読んで、やれやれと思っている。



「井筒」に想う

観世流梅若会 佐甲 富江

私の住む住宅地は山を削って造成した所で、今でも秋になると空き地には芒が群生する。この頃になると手折られてきた一握の芒を舞台に置く「井筒」の能を思う。過日、ある婦人グループの文化講座の一つとして鎌倉に能観賞にでかけた。この日の演目は「井筒」だった。ほんの少し知識があるという事で説明を申しつけたのだが、実際には主催者側のあら筋からお囃子に至る迄、丁寧なお話を伺った。からの演能で私はホッとした反面、普段の稽古では謡本の字面を追うのが精一杯、シテの心情まで理解する事などできない自分の勉強不足を恥じ入った次第だった。昔は一応、古典文学を愛する少女だったから、この能が本拠とする「伊勢物語」も熱心に講義は聞いたつもりだが、今や立派な本は他の全集と共に本棚に並んでいるばかりだ。秋になると「井筒」の能を探して毎年観に行く人がいる。その人が言うには九月の「井筒」には若く艶めく芒が立てられ、晩秋には老いて、ほほけずられた芒が身にしみるそうだ。日常の雑事に追いたてられ、あわただしく月日の過ぎる速さ

を嘆いている私にとって、この様に「ゆとり」のある時間が持てるのはいつの日かと家路を急ぐ道すがら揺れる芒に思わず溜息をつくのでした。

松尾鉾山の思い出

連盟副会長 高岡 幸彦
観世流

盛岡へ行くと、南部片富士といわれる岩手山が西に見える。その岩手山を隔て、向う側に最近有名になった八幡平がある。その八幡平の中腹、海拔九百米の所にかつて松尾鉾山があった。硫黄、硫化鉾を産出する山で、盛時には従業員三千七百人、鉾山に居住する人は一万人もいたが、硫黄を産出する山は石油を精製する時に副産品として硫黄がとれるようになって殆んど倒産してしまった。松尾鉾山も今はないが、ここに私は昭和三十一年から一年間勤務した。鉾山というた荒くれ男の集る所と思われがちだが、松尾鉾山は決してそんな所ではなく、心優しい人が多く集っていた。その人達と謡曲も楽しんだ。山麓に松川温泉というひなびた温泉があり、十月初めの紅葉狩をかねての謡会とはとても楽しかった。その時頑張て「熊野」を無本で謡ったら、盛岡から来た人達に先生と間違えられた。困惑したもの

の内心大いに気分をよくしたことも忘れがたい。

機会を得て松尾鉾山跡地、松川温泉、藤七温泉等訪れてみたいと思う今日この頃である。

(仮称)「横浜能楽堂」現況報告

去る十月四日、雨もよいの日であったが、能楽堂の工事現場を訪問した。ご存じのように工事は竹中・住友・紅梅の共同企業体によって進められているが、当日は地下二階駐車場部分のコンクリート打設のための型枠及び鉄筋工事の最中であつた。

所長の海老澤さんは熱海のMOA美術館の太閤の黄金の茶席光彬屋敷をはじめ、由緒ある木造建築物の復元を数多く手がけて来られたベテランである。

工事は十月中に地下二階のコンクリート打設を終え、十一月は地下一階の型枠・鉄筋及びコンクリート打設、その後、来年二月一杯で地上二階及び二階の鉄筋コンクリート構造部分の工事を終了する予定である。

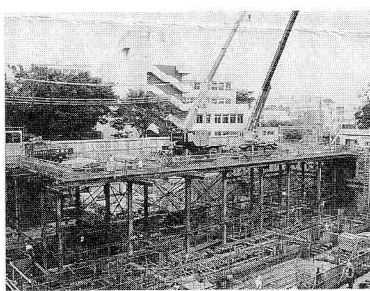
待望の能舞台は来年六月着工の予定で、名古屋の専門業者、魚津社寺工務店が担当する。

訪問時現在、進捗率は約三〇%、作業員は約八〇名であるが、来年十月のピーク時には二百名

程度に増加する見込みである。

舞台は明治八年、東京下谷の上根岸に加賀十三代藩主前田斎泰公が創建されたもので、大正八年に貴族院議長松平頼寿氏が譲り受け、豊島区駒込染井に移築した。移築の際には法政大学の山崎静太郎(楽堂)教授が設計監理を担当されている。

今回の工事は解体材を仮組みし、実測を行って創建当時の姿に復元することを基本方針として居り、このため不足する部材は新材を補充することになる。仮組みの際、地謡座は移築時にかの設計変更が行われている



地下2階の工事状況

《編集後記》

いつも原稿は各流の御協力によって満度集まっています。編集委員としては一番嬉しいことです。

第四二回横浜能は、出し物がうけたのか、朝日新聞でとりあげられたのがよかったのか、売れ行きまずまずで、本号の発行される当日には多分完売になる公算大です。これは横浜市内の能楽ファンの特テンシャリテイの大きさが示されたものとして、開設準備に動き出した横浜能楽堂の運営にも、明るい希望を持たせました。

来年もまた是非御協力下さい。

(S)

横浜能楽連盟 連絡先

●文書(輸送)又はFAXの場合
〒233横浜市港南区丸山台二
一九一七新堀方 FAX〇
四五―八四四―二九〇三

●電話の場合

横浜市役所 〇四五―六七
一―二二二

市民局文化事業課 渡辺